

ベートーヴェン、そして…

第5回 テーマは〈結晶体〉

幻想の中に浮かび上がる作曲家の「真実」



●プログラム

ベートーヴェン：6つのバガテル 作品126
バッハ：半音階的幻想曲とフーガ ニ短調 BWV903
モーツァルト：幻想曲 ハ短調 K475
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番 変イ長調 作品110

'21/ 6月27日(日) 14:00 住友生命いずみホール

S 5000円
A 4500円
(全席指定)



小山実稚恵「ベートーヴェン、そして…」シリーズ公演だより No11 (2021/4/10)

小山実稚恵ピアノシリーズ「ベートーヴェン、そして…」第5回(6月27日<日>、住友生命いずみホール)を簡単に紹介します。

3 音楽家を探求するプログラム

■ ベートーヴェン：6つのバガテル 作品126

「バガテル」は“ちょっとした”という意味で、音楽では器楽(ピアノ)のための小品を指します。演奏時間もほとんどが3分程度です。広く知られているベートーヴェンの『エリーゼのために』(1810年作曲)もバガテルです。

こんど演奏される「6つのバガテル 作品126」は、1823~24年に作曲された連作曲集で、生涯最後のピアノ作品として知られています。

(約20分)

■ バッハ：半音階的幻想曲とフーガ ニ短調

BWV903

バッハのクラヴィーア(オルガン、ハープシコード、ピアノなどの鍵盤楽器のこと)独奏作品のなかでも、とくに人気のある作品です。ただし、作曲時期や目的などは不明です。

前半は幻想曲(形式にとらわれず、作者が自由に楽想を展開させて作る曲)、後半がフーガ(複数の主題が次々と複雑に反復されていく楽曲形式)で構成されています。

ベートーヴェンはこの曲をよく研究したといわれています。ロマン派音楽を先導したベートーヴェンですが、この作品の中に(いや、バッハの中に)近代音楽の礎となった音楽形式と、音楽家による主観表現との高度な融合をみたのではないかと考えられています。

(約12分)

■ モーツァルト：幻想曲 ハ短調 K475

1785年の作品です。当時、幻想曲はソナタ演奏の“前座”として演奏されるのが慣例だったらしく、この曲もピアノ・ソナタ第14番とセットで出版

されました。

作品は“幻想曲”の名のとおり、自由に展開していきます。とくに、緩急のテンポ変化、頻繁な転調によって起伏に富んだ印象を与えています。さらにモーツァルトは、当時のピアノの音域を余すことなく活用し、この曲をいっそう色彩豊かにしています。

(約13分)

■ ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番 変イ長調 作品110

ベートーヴェンが没する5年前の1822年に完成、出版されました。晩年の3大ピアノ・ソナタ(第30~32番)のうちの一曲で、前作の第30番と同様に叙情感があふれていますが、内面性はいっそう強まっているといわれています。

この時期、ベートーヴェンにはいろいろな病気症状が現れ、また身辺のごたごたもあって心身ともに不調でしたが、一時の弱気を克服して創作意欲を取り戻し、創作意欲を高めていました。そうした状況も、この作品に反映していると考えられています。

曲は3楽章で構成されています。

第1楽章は主題がとても美しく、第2楽章は軽やかな中にも全体的に不気味な雰囲気を漂わせます。第3楽章はひじょうに斬新な構成と内容です。序奏を経て「嘆きの歌」が静かに美しく奏でられます。「嘆きの歌」はフーガと交代し、クライマックスを形成します。フーガは再び「嘆きの歌」と交代しながら全体を終えます。

(約18分)

(マ)

第5回・第6回セット券(6000円)発売中

第6回(シリーズ最終回)は 11月7日<日> 14:00 住友生命いずみホールにて開催します。セット券のお申し込みには大阪新音会員登録が必要です。詳しくは ☎06-6926-4888 へ。

ベートーヴェン ソナタ第31番

「自画像」のような作品

クラシック音楽に興味を持ち始めた琉樞くんは、クラシックオタクのお爺ちゃんが、小山実稚恵さんのリサイタルの聴きどころ見どころについて話しています。

●第九、荘厳ミサと並行し作曲

琉くん 小山さんの『ベートーヴェン、そして…』シリーズも今年の第5回6月、第6回11月で終了ですね。

爺ちゃん そうや。『ピアノ・ソナタ第31番と32番の、傑作のそっくり踏みや。』

琉くん 早よ、お爺ちゃんのウンチク、聞かせてーや。

爺ちゃん せやな。でもカニンヤけど、この辺は面田のピアノソナタが少なく、難しい話が多いから、辛抱して聞いてんか。第30・31・32番の『ピアノ・ソナタ』はセットと言われて、1820年から22年の間に次々と作曲された。この頃、ベートーヴェンはリウマチや黄胆のため体調がかなり悪くて、寝込む日も多かったらしい。それなのに、このとき、第九交響曲や『荘厳ミサ』『ミサ・ソレムニス』といった大曲、それと並行して最後の3ソナタも作曲した。

琉くん すこい人やな、ベートーヴェンって。



爺ちゃん この時期の『ピアノ・ソナタ』はフーガや変奏曲をどんどん入れて、それまでと趣向がかなり変わってきている。しかも第32番の後にはソナタを書いてない。5年後の1827年に亡くなるんやけど、新たなソナタに向けたスケッチ(曲想メモ)などは残ってない。

琉くん つまり、最後の『ピアノ・ソナタ』と意識してたんか？

爺ちゃん 交響曲は第10番のスケッチが残ってて、意欲はあったと見られていん。

琉くん するん、ピアノ・ソナタは32曲で打ち止めと聞いてんか。

●切々と奏でられる「嘆きの歌」

爺ちゃん まあ見ていごか。第31番の終楽章の第3楽章には、「嘆きの歌」と呼ばれている美しいアダージョ(ゆめゆめ)と指示された箇所(こころ)と、フーガ(複数の主題が次々と複雑に

反復されていく楽曲形式の箇所)が交互に現れる。まるで、悲しみから救われかけると一転して落ち込む、そして再び乗る越えていく…というように。ベートーヴェンの人生の苦しみ、病氣、それに成せなかった恋愛が詰まった「人生の回顧作品」という人もいてる。



琉くん 小山さんは「感情の部分で一番好きなソナタ」と言っってはったなあ。

爺ちゃん もう、ロマン派の領域に入ってるかもな。

琉くん ベートーヴェンは、音楽の可能性を、ソナタ形式から、フーガと変奏に求めるようになった。ま、総仕上げと云うことなんかな。

爺ちゃん 音楽評論家の吉田秀和さん(故人)は著書で「ベートーヴェンが、こころあつてほしいと自分に望んだ自分の姿が—実生活では、たぶんかなえられないであろうものがここに鳴り響いてると感じない訳にはいかない。31番は、老いたる獅子としての自画像、痛切な悲哀の跡が刻まれている」と書いてはる。

琉くん ふーん。人生経験を積まんと、弾かれへん曲なんやなあ。

爺ちゃん さいぜん、第31番・32番のソナタは、第九交響曲や『荘厳ミサ』

と並行して書かれたと言ったやろ。第31番は大きな喜びのクライマックスで終わる。けども、実は「求められていた平和は、作品111(32番)のアルヘッタ(第2楽章の主題)の上に降り、これを満たす」らしい。ロマン・ロランの考えやけど。

琉くん 確証はあんの？

爺ちゃん この第31番のスケッチはな、『荘厳ミサ』の第5曲のアニヌス・デイ(平和への賛歌)に出てくる戦いの光景の後に、続けて書いてあるかららしい。戦慄の音楽の後に、こんな優しい甘美な曲が、よっ頭に浮かんでくるもんや。

琉くん 晩年を迎えた芸術家の苦闘？ それとも到達点？

●第32番もまた「天上の響き」

爺ちゃん 次の第32番の響きは天国的と言われている。第2楽章の変奏は「この世を超えた美しさすら感じさせる」というわけや。たしか、音楽学者のシエンカーは、この楽章を「後光が差す」とまで書いている(『ベートーヴェンの最後のソナタ作品111批判校訂版』)。

琉くん 小説の中に、この第32番ソナタの素晴らしさを書いている人もいてるんやろ？

爺ちゃん ドイツのトーマスマンや。小説『ファウストウス博士』で、主人公の作曲家レーヴァーキーンの師匠のクレッチュマルが、講演で第32番ソナタを1時間にわたって語る箇所や。若い頃に深刻で劇的な葛藤を表現したベートーヴェンは、晩年、フーガとかトリラーといった古くて廃れたスタイルに戻っていった。それはなぜか？ 個性的な作風から、没個性のスタイルに還ること

で、破天荒な深みを持つ斬新な音楽を作るのに成功した…という解釈やな。

琉くん そういえば、ベートーヴェン以降のシューマン、リスト、ブラームス、シヨパンとかは、あまの『ピアノ・ソナタ』を書いてへん。と云うので、よう言われるけど、第32番は、たった2楽章のソナタになってる。珍しいなあ。

爺ちゃん 何で2楽章仕立てか、というところについて、弟子のシンドラーが「師匠は第3楽章を書く時間がなかった」と言っただ、と本に書いているけど、疑う人が多い。くだんの小説『ファウストウス博士』のクレッチュマルは、「芸術形式としてのソナタは極限に達し、終わりを告げた。フィナーレの動機は、最終目標に達したソナタが運命を終えた偉大な別離」と講演をしめくくってる。

琉くん トーマスマンは、ノーベル文学賞をもろた人やな。マラーらしき作曲家・指揮者を主人公にした小説、『ヴェニスに死す』は映画にもなった。

爺ちゃん マンはナチスに対抗して論陣を張ったから、後にスイス、アメリカへ亡命した。ユダヤ系の大指揮者のブルノ・ワルター、オットー・クレンペラーと友人で、音楽には詳しくあった。この小説を書くために、哲学者・社会学者のアドルノから教えを受けた。『ピアノ・ソナタ』に関しては、アドルノの分析が基になっていると、マン自身が書いている。

琉くん 難しなってきた。お爺ちゃん、かなりの年齢になってきたら、少しは得心できるやろけど…。

爺ちゃん 第32番ソナタからは、すべてのものが帰一する宇宙へ戻っていく楽聖の姿が見える。とすると、人生を回顧したような第31番は、その前触れやったのかもな。

琉くん そついう観点でベートーヴェンの『ピアノ・ソナタ』を聴くと、何やら姿勢も自然にピンとこまっちゃう。お爺ちゃん、ありがとう。



小山 実稚恵 (こやま・みちえ)

人気・実力ともに日本を代表するピアニスト。チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクールの二大コンクールに入賞以来、今日に至るまで、コンチェルト、リサイタル、室内楽と、常に第一線で活躍し続けています。2017年までの「12年間・24回リサイタルシリーズ」(ピアノ・ロマンの旅)は、演奏内容と企画性において高い評価を受けました。

2019年には『ベートーヴェン、そして…』をスタートさせました。

これまで国内外の主要オーケストラ、および数多くの国際的指揮者と共演しています。協奏曲のレパートリーは60曲を超えます。

東日本大震災以降、被災地でも演奏を行い、仙台では被災地活動の一環として自ら企画立案した「こどもの夢ひろば“ボレロ”」を開催しています。

CDはソニー・ミュージックジャパンインターナショナルと専属契約を結び、2020年7月にリリースした最新盤「ハンマークラヴィーア・ソナタ他」は『レコード芸術』の特選盤に選ばれました。著書に『点と魂と』、平野昭氏との共著『ベートーヴェンとピアノ「傑作の森」への道のり』、『ベートーヴェンとピアノ 限りなき創造の高みへ』があります。

これまでに文化庁芸術祭大賞、東燃ゼネラル音楽賞本賞、文化庁芸術祭優秀賞、芸術選奨文部科学大臣賞等を受賞。2017年度に紫綬褒章を受章。2018年度には大阪市市民表彰を受けています。